

急病人は見た目で見える

◆訓練を受けなくても顔の特徴で急病人を識別できる

2018年はスペインかぜ（インフルエンザ）が世界的に流行してから100年目にあたる。インフルエンザが流行するこの季節、せきをしている人や、体調の悪そうな人を避けて、自己防衛に心掛けている人も多いのではないだろうか。

そうした急病人を見分ける能力を定量的に研究した成果が、17年11月に発表された。スウェーデンのストックホルム大学とカロリンスカ研究所のグループの報告によれば、訓練を受けていない一般の人でも、偶然を上回る確率で、顔写真を見るだけで急病人を識別することができる。

研究は二重盲検試験により行われた。健康なボランティアに、大腸菌内毒素を含む、あるいは、含まない薬液が接種され、この急病モデルで症状が顕われる2時間後に顔写真が撮影された。その写真に基づいて、医学的な教育を受けていない学生に、症状の有無を判断させた。その結果、81%のケースで正しい識別がなされており、数秒間、顔の様子を観察するだけで、急病人を有意に区別できることが明らかになった。判断のポイントとして、顔や唇の色の悪さ、下がり気味のまぶたや口角、腫れぼったい顔などが使われていた。

◆急病人を識別する能力が感染症の拡大を抑制している

動物が、嗅覚などを使って、病気の個体を識別することはよく知られている。人間にもそうした能力が備わっていることは、これまでも議論されてきたが、定量的にデータを示したのは、今回の研究が初めてである。

人間の場合、顔の表情だけでなく、疲れた様子、不快な体臭、歩き方の変化など、さまざまな兆候を総合的に使って病人の識別を行っており、実生活では、今回の研究より、より正確に急病人を判断していると考えられる。

顔などの画像情報に基づく識別は、人工知能が得意とするものであり、急病人の識別の確度を高めて医療診断に応用することも考えられる。しかし、人間が本来持っている能力を生かして、日常生活で感染症の拡大を防ぐ行動も、また、大切にしたいものである。

【戸潤一孔】